

令和2年度 第1回神戸市発達障害児（者）支援地域協議会 代表者会

日時：令和2年10月8日（金）18時半～20時半

場所：神戸市立総合福祉センター4階会議室

議事内容

- (1) 各関係機関より、発達障害児（者）にかかる支援事業、取組状況、今後の計画について
配布資料（PDF）のとおり
- (2) 本日議論いただく残りの2つの課題
 - ①思春期世代の支援
 - ②支援機関の質の向上

（会長）

5つの課題のうち、残り2つの課題についての意見交換に入ります。

「思春期世代の支援」「支援機関の質の向上」の順に意見をいただきます。また、あわせて、事前にお聞きしている本日欠席の委員の意見についても紹介いただきます。

（事務局）

欠席委員のご意見ご紹介をさせていただきます。

- ・同じ思春期世代でも義務教育の中学生は学校で支援されているが、高校生の障害生徒に対する支援がわからない。
- ・学びの支援センターについてはどこまで支援していただけるのか、中学校でどのように評価し、その評価をどのように高校にまわしているのか、実態がよくわからない。
- ・特別支援学校に在籍していない生徒をどうサポートしていくかは、とても大切なことである。支援は学校がすべきだと考えているが、家族が納得して特別支援学校に入れている場合はいいが、そうでない場合、障害と結びつかないまま不適應となる場合や障害の特性を持ちながら普通校に通っている場合の生徒のサポートがより必要である。
- ・15歳以上の居場所のない高校生については公立では支援がうけられるが、私立はどうなっているのか、学校の努力だけに任せられてしまうのではなく、学校と連携をとりながら親も巻き込んでいくことが重要である。
- ・大学～大人へと支援をつなぐことや、高校～大学への支援も必要である。震災後、医療と教育の連携は学校保健の活動として深まったと感じているが、同様に教育と福祉の連携もとても重要である。
- ・会議メンバーにひきこもり支援室が入るのは大事である。発達がある身でひきこもりがある。ひきこもりと思いかかわっていたら原因が発達だったというケースがあり、大学生もそうである。
- ・発達障害の大学生の中に、WEB授業で精神的についていけず鬱になる人が出てきている。WEB授業では対面して人と人との関わりの曖昧なところを経験できない。大学生対象のSST事業はセルフヘルプであればいいと思う。いろいろな大学による仕掛けを考えていけばいい。市内の大学の保健室なら事業にかかりやすい。
- ・高等教育機関の教職員がもっと発達障害を理解している必要がある。

(会長)

前回からの話、いただきました課題に加えて、思春期世代の支援ということで話しさせていただきます。新しい事業ということで、ひきこもり支援室の設置や発達障害者支援センターの事業や、学校での高校生への通級指導ということがあります。是非、委員の先生から活発な意見交換をお願いします。特に今、特別支援学校にいらっしゃる方以外の普通校に行っている方の就労に関する大きな課題もありますし、大学生の支援についてもご意見いただけたらと思います。WEBの問題についてはいかがでしょうか。

(委員)

最近学校関係において普通の講義もしますけれどもオンラインというのが当たり前になってきました。先程WEB授業によって鬱になっていくという話がありましたが、実際にZOOMを使って講義をするのですが、一番大きな問題は、対面の時は相手の表情を見ながら、ここでちょっと説明をしたらわかってもらえるかなど、様々なことを考えて受講者の反応を見ながら内容を変えていくわけです。こちらの気持ちとか、こちらのしゃべっている内容にあわせた様々な情緒を伝えようとするのですが、オンラインの場合それが伝わっているのかどうか全くわからない。やはり相手方の反応が読めないで、それこそ大きな会場で人が誰もいないところでしゃべっているような、しゃべる側の不安感がある。内容だけ考えたら確かに伝わるけど、もっと伝えたいことがある、学ぶ側からも同じ感じを持っているように思われます。

次に特別支援学校からの就労につながる方々とは別に、保護者の方々の中にどうしても学歴が必要だということ、本来ならば特別支援学校やそれに準ずる場所で指導した方がいいのに、普通校から大学に行く自閉症スペクトラムやADHDの特性が強い子が沢山いるわけです。

普通校から大学に進学し就労につながる方が有利であると考えている親がいるようなんです。

一例をあげますと、わたくしの教え子の子どもさんが、自閉症スペクトラムですがものすごく能力が高い。1浪して某国立大工学部に10年在籍し博士課程まで取り、工学部で表彰されたぐらいのIQ140の学生がいたのですが、その学部ではじめて就労ができなくて、精神保健福祉手帳をとって就労しました。要するに学歴ではなく、協調性とか、その人が入る場所、環境との関係性が大事なんですよ。人間関係、対人関係が作れない、また保護者がそれに対応してきていないような場合はダメなんです。マイペースではダメ、学歴だけではないということを親御さんにどうわかってもらうかが大事。

行くべき場所がみつからなくて、普通校に行く。確かに試験には通るんですが、適応できない。

兵庫障害者職業センターに調べていただきたいのですが、学校歴などの情報があるかどうか、大学へ行った人の就労状況がわかれば、お願いしたいです。

(会長)

高等教育での先生方の意識はどうなっているのでしょうか。

小学校、中学校と違い、高校生の先生方は発達障害への理解というのはどうなっているのでしょうか。

(委員)

私の担当は特別支援教育になるので、一般校の教員がどれぐらいの意識があるのかは、わかりません。た

だ 3.4 年前高校通級を開設するにあたって、通級指導への理解を求めるには大変苦勞をしたと聞いております。

(会長)

ありがとうございます。神戸市内には大学がたくさんありますが、大学との連携というのも非常に大事なのかなと思います。また高校との連携とのかを考えると、先生方の意識というものが重要なのかなと思います。

つぎに思春期世代の支援のことについてですが、わたくし小児科になりますが、小児期から思春期に移行の際、紹介先がなくて困ってしまい、行き場がなく医療から離れてしまうとか、学校から離れてしまって所属がなくなるによりひきこもりとか支援が受けられなくなってしまったとか、そのあたりいかがでしょうか。

(委員)

別の視点で話させていただきます。

先程、お話にありました自己理解をどこで見つけていくのか、発達障害の就労の話で出てたんですけども、自己理解というのは非常に重要だと思うんです。

私のところにも非常に高学歴の方がたくさんいて、先日、某国立大医学部の方が手帳をとり就労した人もいました。そういう子たちの大半は、大学時代の不適応で発達障害を診断されている。中高の時期に、自分の苦手・困り感について相談してほしい、人とうまくいかない、すぐ喧嘩する、眠れない、ゲームで親に叱られる。自分の中でうまくいかない場合、どんなふうに理解するかが大事。かならずしも発達障害でなくてもいいと思うんですけども、自分の困り感を理解しどこかに相談できればいいと思います。空耳、眠れない、気分が落ち着かない、困りごとがある場合、精神疾患とかについて、どうとらえたらいいかということについての見解の共有というのが少しずつとられることがあるといいと思う。その中でたとえば幻聴が聞こえるという場合はそういう病気もあるとか、そのような場合にはどう対処したらいいのかとか、学校教育の中で相談できるようにならないかなと思います。

別に障害だからとか、障害の診断とかの問題ではなく、学校教育の中で困り感を相談していけるようにならないかなと思います。

障害としてくくってしまうと生きづらい。当事者は小さい頃から困っていたんだ、ということを中心に先生がどう気づき、どうサポートするか、理解して行ってほしい。

当事者が困っているということをどう受け止め、どう伝えるか、相談できる環境というのが大事だと思っています。

今「NPO法人須磨みらい」が高校に入ってタバコ・お酒・妊娠などの問題と同じように精神・発達障害が扱われるのでとても相談しやすい。それが先程の自己理解の話につながるのではないかと思う。私自身が発達障害と診断するときは、親にも子にもあっさり伝えるようにしている。発達障害というのではなく、これが苦手なんだよねと、しんどいよと理解してあげ、認めてあげる。そうやって理解して関わって行ってあげることが大事なかと思う。理想形ですが、学校現場で悩みが相談でき、切れ目のない支援につながっていけばいいかなと思います。

(会長)

自分自身の状況を知るといのは難しいということ、我々小さいお子さんの親御さんに伝えるときにも理解していただくのは難しいのですが、また子供たちが成長し自分自身のことを理解していくことが出来るのか悩むところではあるんですけども、小さいお子さんを見られている先生方はいかがでしょう。

(委員)

私のところでも ADHD の子が 20 人くらい、起立性調節障害で学校に行けない子が 20 人くらい、起立性調節障害の子だけだと 50 人くらい、自閉症の子が 20 人くらい来てて、私ともう一人の医師と臨床心理士とでケアしている状態です。先程高学歴でという話がありましたが、以前私のところで働いていたドクターが、超エリートコース出身で知識はものすごくある、外来診療をすると、自分のもっている知識を全部出そうとするので時間がかかる、ちょっと遅いので時間アップしてくださいという、早口になったんです。やっぱり君は外来に向かないねという、私もそう思いますというので、相談して、集中力は非常にありますので、二人で研究機関を探しました。リサーチセンターで集中力を生かして業績をあげまして、現在某医科大学講師になっています。誘導してあげると、そういう人たちというのはちゃんと業績をあげて能力を発揮していけるんですね。

最近、不登校になっている子供たちを 3 人くらい診ているのですが、その中に、学校の授業が物足りない、行っても面白くない、わかっている、塾は面白いが、学校はいきたくない、ロボコンのコンテストに頑張っているという子がいます。

これまでの学校教育は、成績が悪く落ちこぼれの子が、学校がおもしろくないといって不登校になっていた。そういう子供たちを診ていたのですが、その一方で本当に物足りなく思っている子供たちがいる。そういう子供たちにはやはり何らかのケアをしてあげなければならない。

以前、ある学校の若い先生が、その学年でまだ習っていない、学校では教えていない漢字を調べて読書感想文を書いた子に「よくがんばったね、すごいね。」と花丸をつけたら、校長先生に怒られた。他の子がめげちゃうから、みんな揃えて行かないと言われて、その場では校長先生に謝ったけれども、納得はしていないと話されていた。

今、日本の教育は結果平等を求めているように思う。それがアメリカでは、結果平等が本当の平等ではないという感覚がある。日本人の国民性には非常に合っている。アメリカでは結果平等を求めようとして、その結果散々たたかれました。彼らは「努力したら努力したなりに報われるべきだ、努力をしていない人たちは報われるべきでない、そんなの不公平だ。」という考え方である。何を公平というか平等というか国民性で随分違っている。私たちはこれから子どもたちと向き合うときに何が平等で公平なのか、考えながら向き合っていかなければならない。

学校教育ではなかなか理解が出来なくて進められない子供たちにも制度は必要ですけども、もの足りなくなっている人たちに対してもケアが必要である。そうしないと、子どもたちは学校から離れていってしまう。年齢をごまかして 12 歳で大学に入るなんてことは、アメリカではありますが日本ではそのようなことは起こりようがない、本当にそれでいいのか。伸びるべき能力をつぶしている、その子その子の能力を引き出すべきである。見直しが必要なのではないかと思えます。

確かに今WEB授業が増えてきているんですけども、わたくしの所にきている子どもたちの中に、中学や高校の学校の授業で板書をするのにものすごく時間がかかる子もいる。普通の授業の時は、板書するのがやっとなんとか時間内に終わるという感じで、その子は試験のとき、別室で先生に問題を読み上げてもらい解いていたという子がいます。そういう対応が必要な子どもたちは、WEB授業では絶対にわからない。一人ひとりに特化した授業であるならばわかるけれども、普通の授業と同じようにさらっと進めると、高校生、大学生でもそういう子どもたちは置き去りにされてしまう。そういう学習障害のある子どもたちが、どんな風に受け止められていくか、どんなケアができるのか、高校や大学の先生方にも考えていただきたい。

今の教育の現場というのは課題が沢山転がっているんですよ、それを一つ一つ潰していかなければならない。私たちは一人一人の個性をちゃんと認め、どういうふうに伸ばしてやるのか、社会の中で生きやすくしてやるのか、人とのコミュニケーションがとっても苦手な子どもたちですが、ちゃんとまわりの人たちが受け入れてくれて、ちゃんと仕事が出来ていけば、それは障害ではなく個性の強い人になる。障害を持っている子たちは、将来障害者ではなくて個性の強い人として、職場で適用していけるような、そういう社会を私たちはめざす必要があるように思います。

(会長)

ありがとうございました。

思春期の問題ということで不登校の問題、一人ひとりの個性にあった教育をどう提供できるのか。

またつまずいた子どもたちがひきこもるというお話がありましたが、その子たちに対して一律の教育をしていくというのではなく、一人ひとりにあったケアが必要となってきますし、知的障害のない子たちには、高校や大学と連携しながら、関わっていかなくてはならないというお話でした。

それでは、続いて支援機関の質の向上について、ご意見をお願いします

(事務局)

欠席委員のご意見です。

・相談窓口は地域活動支援センターへのスーパーバイズの役割を担っている。支援機関や事業所につないだものの、相談窓口に戻るケースや診療所から紹介するケースもあって、発達障害児者の中核になる相談員の体制が不十分ではないか。

・区のくらし支援課の職員によると相談者のほとんどが発達障害者のケースであり、コロナで仕事がなくなり困っている。相談ではどのようにすればいいのかという具体的なアドバイスができるような人材が必要である。

・コロナという情勢の変化について対応できるように相談支援機能を充実させる必要がある、人数だけでなく相談できる人材をそろえる必要がある。

・放課後等デイサービスに対する事業所研修については義務化すべきである、職員の責務と自己検査の両面で質を向上していく必要がある。

・就労移行支援事業所については就職した後のアフターケアをどうしているのか、実情を公にしていく必要があるのではないか。例えば成功事例、失敗事例を共有する、また自立支援協議会に全く出席しない、社会福祉協議会の研修に参加しないところについては、その支援情報を共有する必要があるのでは

ないだろうか。

(会長)

ありがとうございました。支援する側の質の向上、神戸市はたくさんの支援事業所がありますけれども必ずしも人材の質が一定していないということで、研修など必要ではないかという、また一方相談窓口などで情報提供する側の人専門性を持っているのかとの疑問があるとの意見がでていましたけれども、それ以外にご意見ありますでしょうか。

(委員)

先程の思春期の事業について報告させていただきたいのですが、大学生の SST プログラムを受託しておりますが、本年度はオンラインの ZOOM を使ったプログラムにチャレンジして、スポット的ではありますが実施させていただきました。プログラムの内容としてはコミュニケーションに自信をもとうという内容で全 6 回、各回 4 名ほどで実施いたしました。大学で役立つスキルとか普段の生活で役立つスキル、ストレス解消のためのスキルを身に付けていただく内容で行いました。

そこに参加した学生さんからメールをいただきましたので、ご参考になればと思い、ご紹介させていただきます。

「このたびはお世話になりありがとうございました。アンケートにもかかせていただきましたが、コミュニケーションについて学べるところがこれまでなかったので、毎回興味深く参加させていただきました。私の場合は人の顔の認識力が非常に弱く、相手の表情がわかりにくいので、会話のみが話のベースになります。そのこともあり相手が何を考えているのかわからなかったのですが、自分がどう考えていったらいいのか少しわかることが出来ました。実際の場面では私の場合まだまだ難しいのですが、これからは学んだことを意識して実際の場面で活用していこうと思っています。今回学ばせていただいたコミュニケーション講座のような教室が不定期であってもあれば、継続して是非通ってみたいと思っています。もし開催されるようであれば教えていただければ幸いです。」というメールをいただきました。この講座で何かしら伝えることができたのかなと、スタッフ一同継続していきたいと話しているところがあります。

系統的にコミュニケーションを学ぶというのは教育の場面でもなかなか機会がないので、実感していただくということが非常に重要で、また継続していくことが大事なのかなと感じております。

オンラインをどのように使うかというのは、かなり難しいところがありまして、便利な点もありますが、使い分けていくことが非常に重要で、コンテンツを伝えるという点での発信は非常に使えると思います。情緒的なこと、感情を伝えるということはオンラインでは不向きだなと思います。選択肢の一つとして活用していくことが大事かなと相談員とも話をしております。その中で発達障害者支援センターからタブレットを 2 台貸与していただいて、うまくそれを利用し視覚支援でタブレットを使いながら板書を文字化して見られるようにしていくとか、そこに情報を事前にいれておいて一緒に見ていく等可能性はいろいろあるのかなと思います。前向きに利用していきたいと思っています。

思春期世代への支援ということで相談窓口も 15 歳から相談できるようになり、年齢層が下がったことで、保護者の方からの相談が毎月新規で 2～3 件入ってくる状態です。その中で子どもさんだけに关わるのではなく、家族支援というのが非常に重要だなと思います。親御さんの思いもありますし、発達をなかなか受け止められないという状況であったり葛藤もあるようで。親御さんから子どもさんに対しての愛情

もあり、伝えたいこと、大事にしたいことを持っておられる。一方子ども自身にも親に迷惑かけたくないとか、自分がちゃんとしてないからだという思いもあり、そこの（ボタンの）掛け違いを上手くひもといていくため、代弁したり、通訳していただくことがスキルとして求められると感じております。

なかなかそれだけではうまくいかなくて、ソーシャルワークとして色々な機関につながっていくことが必要で、相談窓口としての経験もそうですし専門性をもって具体的なプラン作りにかかわっていくことが必要かなと思いますが、かなり時間のかかることになります。そういった意味で地域の支援事業所たくさんありますけれども、その中でも発達相談窓口でも、地域活動支援センターのコンサルテーションという役割も担っておりますので、課題やSVの機能を学ぶ機会があればありがたいなと思います。

そういった意味では地域事例検討会の方は学ぶ機会となり、職員も相談窓口職員だけでなく、いろんな部門の職員も参加し学ぶことができればと思います。

（委員）

思春期世代向けの自然な形での居場所あればいいという意見があります。

人によって特徴やタイプが違うので嫌ならば抜かれる気楽な場所で。自分の進路の相談だとか得意なことを披露できるなど、マイペースに話を聞いてもらえる場所があればいいなと思います。

年齢に関係なく、中学生で不登校になっている子どもはとて多いので、音楽を聴いたり、自分の好きなことができる所、行く所がなく困っているとの意見があります。

（会長）

発達障害者支援センターでも居場所事業をしていただいています。どこがされているのか、それぞれの居場所が、発達支援機関としてどんな特徴があるのか、つかみにくいかなと思います。

（委員）

支援機関の質の向上というところで、ジョブコーチ養成研修というのがあるが、1回限りのため、フォローアップの研修をしていただきたいとの意見が出ています。またある程度経験を積んだジョブコーチをシニアジョブコーチと呼ぶことは出来ないだろうか、ベテラン職員には処遇・インセンティブがつかないだろうか、処遇が良ければいい職員が付きますので必然的に質の向上につながるかと思いますが、なかなか難しい問題かと思われま。

それとお話いただいた巡回支援事業でのカンファレンスの実施はとても素晴らしいと思います。カンファレンスであったりケース会議という形で、横断的にやることによって質の向上につながるのではないかと思います。

連携という枠組みの中で取り組んでいけば、個人情報の問題もクリアになり、ケース会議もできるようになると思われま。

横断的というのが非常に重要で、それぞれ研修を受けた人が各施設に戻ったときに、マイノリティになっていないか、一人で抱えこんでいないか、ケアしてあげることが必要。われわれの中でもスタッフの疲弊、燃え尽きということにならないよう、横のつながりをもつという面でも合同グループという形でのカンファレンスというのは重要になり、お互いケアをするようにしておりますし、他の機関からいい仕事しているなという話になるとモチベーションもあがり、さらにいい仕事ができるようになると思われ

ます。

また家族支援の場合、ペアレントメンターという制度があるが、支援者側にもメンターという制度があれば疲弊を防止し、いい仕事ができるようになるのではないのでしょうか。

(会長)

マイナス評価ではなくプラスの評価をきちんと出していくこと、そしてインセンティブという形でそういう方々が働き甲斐のある場所を作っていくことが大事ということでしょうか。

また医療からつなげようとしても支援機関のそれぞれの特徴がわからず繋げることができない。困ってしまうので、わかるようにしてほしいことと、思春期を扱っているところは数が少ないため、情報をきちんとつないでいくことが必要なと思います。

(委員)

先程お話がありました学歴の話になりますが、大学に通っていた方がしんどくなり中退して3年ぐらい閉じこもった後、やっと事業所に通えるようになって、その後移行事業所に行き就職が決まる所でしんどくなってしまい、また半年ぐらい閉じこもってしまった。その後やっとなんとか居場所にまた通えるようになったんです。就労機関等の関係機関との連携は確かに大事だと思うんですけども、うまくいかなかったときに、また閉じこもってしまったら、リスタートをするのはかなり難しくなる。ダメージを受けてしんどさを蓄積してしまう前に、自分の居場所、精神的に落ち着く場所があればいい。やはり就職した後も居場所というのは必要だと思います。

神戸市内で居場所（毎日型）は1か所2名のスタッフでやっておりますのできびしい状況です。発達の特性からセンター型の居場所の利用がうまくいかないときがあるようです。そういうときは何らかの配慮していただければと思います。いろいろな面で、ぜひスーパーバイズしてほしいと思います。

(会長)

居場所とかひきこもり支援室にも繋いでいただけたらと思います。

(委員)

ジョブコーチはそこそこ定着してきている。結構大きな特例子会社である事業主さんの所でも、時間がたち慣れてくると、その人が障害者だということを忘れてしまって、どんどん負荷が大きくなってしまいいしんどくなることがある。その時に助けてくれと言っても、直接の上司が障害のことを全然わかってくれない場合などがあり、わかってくれる人がさらに上の人になる場合などはそこに相談に行きにくいということで、職場で相談できなくなり、外の機関に相談できる場所が必要になる。できればその時にジョブコーチに相談できればいいのだが、使うことができない。当事者が就職後に定着をしていきたいと思うがヘルプを出す機関が企業外にないと困っている話を4件ぐらい聞いている。相談事業所が定着するために動いてくれるけれども、就労してから離職しないためにも、切れ目のない支援、相談ができればいいなと思います。

(委員)

ご本人が気軽に電話をして連絡してくれると、ジョブコーチを使うかどうかは別にして相談に乗れる。以前ジョブコーチを使っていた人の場合、ジョブコーチに「職場の人がわかってくれない、どうしたらいいの、やめたい。」等、よくメールを送ってきていました。繋がっているとやりとりは出来るのですが、わたくしどもの事業所を利用しないで就職した方も沢山いらっしゃるの、そういう方が困ったときにアクセスできるかどうかとなると、そこまで周知できていないので、きびしいご指摘ですが、なんか上手く考えられないかな、今後検討していきたいと思います。

(会長)

ありがとうございます。ご検討していただいて次回の会の際にご紹介していただけたらありがたいなと思います。お話をさせていただきましたが、発達障害の子どもたちを支えるために地域の医療機関の支援・連携が必要になってくるかと思いますが、先生はどのように感じておられるのか、ご意見でございますでしょうか。

(委員)

今は神戸市の自殺対策にかかわっておりまして、その経験からいいますと、先程お話聞かせていただきましたが、発達障害児者は何人ぐらいいるのか、現状はどうなっているのか、できれば乳児期の場合、幼児の場合、小学校、中学校、高校の場合など、系列ごとに子どもを追いかけていく必要がある。社会的にどうなっていくのか、人数等把握が必要だと思う。あと目標がわからない。発達障害のある子どもたちを個性を持った人たちと定義するならば、目標として子どもをどうしていきたいのかがわからないと、どう導いていっていいのかわからない。

また、スペシャリストが少ないと思われま。かかりつけ医研修をしていただいているが、研修をうけ知識を得てスキルアップしたかという現実的にはそう上手くいかないという問題もある。やはりサポートする人たちのスキルアップが必要になってくる。また発達障害児者の保護者にも同じように精神的な援助が必要な方もいらっしゃる。現状、どうなっているのか。把握することが必要です。

増えているのか減っているのかもわからない。どうやって追いかけているのか。支援している所と、市の機関とで多岐にわたって連携する必要がある。あらゆる支援していくためにもチームを作る、専門性を高めるためには、専門の学校をつくる等していかないといけないのかなと思います。地域性のあるものが必要になってくるのではないかな。

(会長)

ありがとうございます。検診のデータベース化と、そのあと学校でのいろいろな連携、治療的なこと疫学的なことの把握も必要になると思われます。

(事務局)

資料説明

(会長)

ここで話し合った内容をどのようにして次期計画作成に反映していただけるのかをお話していただきましたけれども、今作っているところだと説明いただいた内容につきましては、次年度に反映していただきますよう、よろしく申し上げます。

今日は多くの報告もありましたので、先生方もまだまだもっと意見をという方もいらっしゃるかと思います。貴重な議論いただきましてありがとうございます。

「思春期世代の支援」に関しましては、やはり自分自身が特性ということをどう理解していくか、いかに助けていくかということが課題になっているかと、そのためには障害があるなしにかかわらず、一人ひとりのお子さんの個性として、その個性を活かすような体制づくりが必要である。思春期世代という範囲が広がりますので、単に医療・福祉ということだけでなく枠組みを超えた支援、連携が必要なのかなと思います。中には一つのケースをカンファレンス等々を通じて、それぞれの事例検討を行い盛り込んだ情報を連携データベースにあげていくということもできるかと思われれます。

「支援機関の質の向上」については、まず支援にはどんなものがあるか、どこにあるのか見えてこない。支援するところと市の機関との連携が必要だし、個々の支援者の能力アップということも必要となる。それに伴って、次にどのように活かせるのかという体制を明確にすることも必要になってくるのかなということをお話しました。

新しくひきこもり支援室ができ、また市立高校では通級という制度がどんどん広がっていく中でそのあたりをうまく繋ぎあわせていければと思います

これで議事を終了させていただき、進行を事務局にお返しします。

(事務局)

閉会のご挨拶